

---

# コーヒーキャンディ

花椿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コーヒーキャンディ

### 【Nコード】

N9837F

### 【作者名】

花椿

### 【あらすじ】

私、柚子華可憐は、マネージャーさん曰わく、売れっ子モデルらしい。

## 一話（前書き）

これ、作者が前に違う題名でケータイ小説で投稿してた話が元になっております。

## 一話

「ここが、私の…」

空港に降り立った私―柚子華 可憐は、小さな溜息をついた。

歩く度に、少し低めのヒールが、カツカツと音を立てる。

私が歩く毎に必ず振り返る、数人の人。…彼らは決まってこう呟くのだ。

「あれって、『柚子』じゃないか」

…と。

―そう。私は芸能界で、モデルと言う職業に就かせて貰っている。

「お前、自分じゃ気付いて無いだろうが、結構な売れっ子だぞ?」

…とは、マネジャーの、熊井さんから聞いた話で。

「あ、あああの、柚子さんですか?」

おっと。

気が付くと、私の目の前には、おそらく同年代と見られる女の子が、頬を上気させて立っていた。

「うん。そうだよ。」

嘘を吐く場所でも無いよね。…私は正直に、最上級の笑顔で返事を返した。

「あたし…も、死んでもいいかも…」

瞬間、トロンとした女の子は二へ二へとした表情でその場にぶっ倒れた。

## 一話。

「おい、柚子。お前が脱走して困るのは俺なんだぜ？」

耳元で、はあっと言う深い溜息が聞こえた。

「…だって。初めて来た場所って、探検したくなるんだもん。」

私は、自分の耳に当てているピンク色のケータイ電話（厳密には、その向こうのマネージャーさん）に、しょんぼりと言い訳をした。

「つか、柚子今どこに居るんだ？」

関係無い話だけど、熊井さんはマネージャーのクセに、タメ口で話す。…ま、気にしてないけどね。

「海。」

ははは。潮風が気持ちいいなあ…。

「はあ!？」

私ね簡潔な返答に、熊井さんは焦ったような声を出した。

「えへっ。」

「…えへじゃねーよ。…ったく。俺が倒れたガキ介抱してる間に逃げやがって…。」

「ごめんなさい。」

電話越しに殺気を感じた私は、とりあえず謝っておいた。

「…まあ、さつさと戻って来いよ。」

…と、熊井さんのその一言で、電話が切れた。

「…しょうがないなあ。」

このままだと熊井さんに殺されかねないし、戻るか。

―私が振り返った時だった。

「…あ。」

「…なあ、これって、ユズじゃね？」

「嘘！？あのモデルの！？」

…その先には、金髪・腰パン・アクセサリーじゃらじゃらなお兄さんが、数人。

私と向き合う形になった。

「あの…」

できればそこをどいて頂けないでしょうか。

「ほー。本物じゃん。」

私の心の声を無視して、金髪のお兄さん達は、近付いてくる。

…あー、熊井さんに殺されるよっ!!

「あのっ!!」

熊井さんの恐怖に憑かれた私は、気付けば叫んでいた。

「あとでお兄さん達とは遊んであげるの、今は通してくれませんかっ!？」

「…遊…?」

恐る恐るお兄さんの顔を窺つと…

「…ありゃ?」

皆さん仲良くポカン顔だ。

…私、変なこと言ったかな?

「あの…」

「可愛いからって、余裕こいてんじゃねえよ。」

心配になって話し掛けようとする、スイッチが入ったのか、ひとりのお兄さんが私に迫ってきた。

…いや、可愛いだなんて…照れるなあ。

…なんて、照れてる場合じゃなかった。

唇奪われそうになってる！？なんで!？

「いやだー!」

こんなファーストキス、まっぴらごめん。力の限り叫んでみた。

ーバツシャアアンツ

「…うえ？」

背後に聞こえた波の音。

それが気になって目を開けた。

…確か後ろって海だったよね。…なんか残酷な音が聞こえたような…。

「大丈夫？」

目の前には、金髪ではなく、黒髪の…爽やかな少年が、心配そうな顔で立っていた。

「え、あ、うん。」

あれ、ていつか…

「金髪の皆さんは…」

いずこへ。

「ああ。海に還ったよ。」

少し冷めた目をして、少年は答えた。

…ふーん。

「帰ったんだ。」

海に。

……海に!?

「竜宮城の人だったのか…。」

私が呟くと、少年は驚いた顔でこっちを見た。…な、なによー。

「…というか、君。何か用事だったんじゃないの?」「…遊…?」

恐る恐るお兄さんの顔を窺うと…

「…ありゃ?」

皆さん仲良くポカン顔だ。

…私、変なこと言ったかな?

「あの…」

「可愛いからって、余裕こいてんじゃないやねえよ。」

心配になって話し掛けようとする、スイッチが入ったのか、ひとりのお兄さんが私に迫ってきた。

…いや、可愛いだなんて…照れるなあ。

…なんて、照れてる場合じゃなかった。

唇奪われそうになってる！？なんで!？

「いやだーーーー!」

こんなファーストキス、まっぴらごめん。力の限り叫んでみた。

ーバツシャアアンツ

「…うえ?」

背後に聞こえた波の音。

それが気になって目を開けた。

…確か後ろって海だったよね。…なんか残酷な音が聞こえたような

…。

「大丈夫?」

目の前には、金髪ではなく、黒髪の…爽やかな少年が、心配そうな顔で立っていた。

「え、あ、うん。」

あれ、ていうか…

「金髪の皆さんは…」

いずこへ。

「ああ。海に還ったよ。」

少し冷めた目をして、少年は答えた。

…ふーん。

「帰ったんだ。」

海に。

……海に!?

「竜宮城の人だったのか…。」

私が呟くと、少年は驚いた顔でこっちを見た。…な、なによー。

「…というか、君。何か用事だったんじゃないの?」

少年が、腕を指差しながら、聞いてきた。

…わ、す、れ、て、た。

サーツと血が引いた私の脳内では、熊井さんは本物の熊に変形していた。

「ぎゃああっ食べないでっっ!!」

叫ぶ私を見て、少年はクスリと笑った。

…あれ？なんだろう…。今、私の胸の奥に、キュンツと小さな痛みが走ったような気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9837f/>

---

コーヒーキャンディ

2010年10月20日16時26分発行